

エッセイ

晩学の「文化経済学」を思う

九州共立大学名誉教授

佐々木 晃彦

1 はじめに—文化経済学会〈日本〉の誕生—

文化経済学(Cultural Economics)という学術用語が定着したのは1960年代以降で、アメリカの学者を中心になり「文化経済学会」が各国に設立されていった。我が国に於ける当学会の設立は、文化インフラの整備に関心が高まった1990年代前半の1992年3月28日で、川村恒明・文化庁長官(1936~)をお招きして発会式を行いました。

倉林義正・初代文化経済学会〈日本〉会長(1926~2021)の挨拶にあった、「潤いのある社会の達成は、物の豊かさと心の豊かさが分かれ難く結びつくことから始まる」の言葉は、学会発起人170名と会員600名の心に深く刻まれました。文化的掛け声が高まる時代、お互いの生きようを認識し、尊重し合うなかでの穏やかな船出となりました。

三善晃・桐朋学園大学学長(1933~2013)は記念講演で、「日本の文化・芸術にとって最も重要なことは、享受の環境をいかに真に豊かなものに出来るかに尽きる」「幼児・小中学生頃から文化芸術に親しみ、自由な心的営みを交わし合える日常生活があつてこそ享受の機会が生きてくる」と問題提起をしました。



(社)日本芸能実演家団体協議会会長(当時)の中村歌右衛門は、芸術活動を妨げている要素として、①企画を立てる人材不足(43%)、②観客・聴衆が育っていない(39%)、③実演芸術家の層が薄い(38%)の3点を挙げ、新しい文化政策や文化制度が噛み合えば日本が文化社会を形成し得る可能性を示していました。

2 サハラで学んだ固有価値

砂漠に覆われ、大西洋に面したモーリタニア回教共和国第2の都市、ヌアディブで、1972～1975の4年間暮らした(注1)。半世紀前の当時は役場も、戸籍を記録するシステムもなかったので、約120万人と言われた国の人口も定かでなかった。その多くはテント生活者です。住所表示がなく、何処に誰が住み、生まれ、亡くなり・・という書類は一切ありません。知人・友人を含めて誕生日を知らず、政府高官の身分証明書の年齢が「35～40」と記載されていました。しかし其の信憑性も疑わしいものでした。他方、時計を持っている者はゼロに等しく、日々の生活にちまちました時間の観念がありません。時間は確かに繋がれているが、私たちが時刻と呼ぶように刻まれることはなかったのです。そう考えると、J・ボードリヤール(1929～2007)が説いたように、「時は祭りなどの儀礼に見られる、単に反復されるリズム以外の何物でもない」でした。日常生活に、刻まれた時間はありませんでした。



“何事について数字の概念が希薄”と考えていました。しかし、我が家の前に聳える砂山が、厚みのある《時の集積》を教えてくれました。砂山は「失われて行く一瞬一瞬で、時間はなるほど過ぎ、消え去るが、何処か深部に豊かに蓄えられる」(E・ユンガー、1895～1998)砂時計となり、一隻の船を飲み込んでいました(写真上)。砂山の力は、モノづくり(開発と生産技術)と、その移動(貿易)に見るモノの迫力とは異にする潜勢力。そこに現れたのは、無いものねだりをせず、C'est la vie(セ・ラ・ヴィ=これが人生さ)と、ラクダを引き連れ、オアシス

を求めて歩くノーマードです。水不足が生んだ砂漠の砂山には、壮大な豊かさの基がありました。それはノーマードがサハラを舞台に、ゆったりした時空の中で制作した生活デザインです。代替性のない、量産不可能な資源や環境に見るモノの固有価値(注2)です。

1982年から95年までニューヨーク・ナショナル音楽院院長を勤めたA・ドヴォルザーク(1841~1904)が、荒涼たる新大陸アメリカの自然に触れ『新世界』の曲想を練った話は有名ですが、数字のないプリミチブな世界には新しいモノを想像するエネルギーが隠されているようです。芸術の愛好家でもあったJ・M・ケインズ(1883~1946)は『一般理論』のなかで「我々が遠い将来を見据えて取り組む積極的な行動は、数字で表す将来の収益の期待値を見てするのではなく、アニマル・スピリット、すなわち、行動せずにいられないという、内から込みあげる衝動に依って事を行う」と説きました。経済・経営は、単なる合理的な利潤と費用の計算だけでは成立しません。高田馨(1915~1995)は『国民経済雑誌』(第136巻、第3号、1977年9月)に「企業と芸術」を発表し、余暇の増大や芸術特性の一つである創造性に注目して「芸術特性の内在化」の重要性を指摘しています。

3 アート系で働くモロ族の気概

イスラム国のサハラに舞台を戻しましょう。小さな個人的体験を偉大な先学の理論に投影するのは面映ゆく思います。他方、芸術経営学体系化の切掛けは、かような先達の教示に加え、合理性からかけ離れた血氣盛んな遊牧民との共同生活と無関係ではありません。押し寄せては消える砂と対峙し、自らの感覚を頼りにオアシスを求めて生きる遊牧民と、形として残らない映像、音楽、芝居などの芸術活動に携わる人々には、共通したものが見え隠れします。芸術活動の管理運営は、ラクダを引き連れて歩を進めるキャラバンと一致します。サハラの自然は何時も穏やかではありません。砂嵐が吹き荒れ(経営環境の悪化)、楽しく歩いていたキャラバン(組織)がコースを外れ、思いもしなかった事態(破産)になることもあります。サハラの遊牧生活には強いリーダーシップが必要です(注3)。

現地滞在中に指輪をつくる機会がありました。打ちっ放しのコンクリート壁に囲まれた中は、砂で塗れた絨毯を敷いただけのアトリエ。銀細工師が一人、ヤスリで製品を磨いていました。見回すと目ぼしい道具は、土中に埋められた手動式吹子、ヤスリが2~3本、そして、製品に光沢を出す目的で使うヤカンには、灰を混ぜたお湯。極めて簡単な道具が頼りの手づくり製品ですが、銀細工師は自分の腕前に自信満々でした。自分の力量を印象付けようと懸命に熱弁を奮いました。

コミュニケーションをとる中で、強調と誇張することを忘れません(注4)でした。時には怒鳴るような大声も。私の静かな態度は応対不足と見なされていました。話には有らん限りの感情を込め、「私を信用しなさい」「私に作らせなさい」と繰り返した。



終始雄弁に迫った銀細工師でしたが、その出来栄えも素晴らしいものでした。この仕事に向き合う姿勢、集中力、器用さ、忍耐力が忘れ難いのです。砂漠で生きるには崖縁での決意が求められます。生きる目的に不可欠な辛抱と禁欲。それは苦しみと悲惨に勝つための強い武器なのです。現地には、セネガル、マリなど近隣諸国からの出稼ぎ労働者がたくさん来ていましたが、彼ら外国人労働者は時間で管理された事務系・技術系(文明的領域)、現地のモロ族は時間を超越したアート系(文化芸術的領域)と、働く領域がほぼ棲み分けされている印象を受けた。

サハラ砂漠を離れて 12 年経た 1988 年 4 月、私はセゾングループに拾われました。5 回目の転職で、勤務地はサンシャイン 60 の 30 階。私は・・遊牧民です。その折りの一体験です。美術展の企画担当責任者に予想入場者数を尋ねました。応えは「やってみなきゃ一分からない」。これには驚きました。責任者は事業計画書、決算書の類に無頓着でした。自動車生産や旅行事業も、「やってみなきゃ一分からない」では部品を調達してラインを組み、製品化して出荷する、或いは《海外の旅》を商品化することは出来ません。芸術活動に携わる実験的精神の体現者にある、数値目標を立てない、計算しない。この大陸的な大らかさに、イスラム教徒の遊牧民が好んで発する「インシャラー」が重なりました。

4 文化インフラ整備の時代

1990 年に政府出資金 541 億円と民間企業の拠出金 132 億円、合計 673 億円を原

資とし、(イ)芸術創造普及活動、(ロ)地域文化振興活動、(ハ)文化振興普及団体活動を対象に助成金を充てる、特殊法人芸術文化振興基金(注5)が創設されました。また、文化に理解を示す経済人が中心となり、社団法人企業メセナ協議会を発足させました。セゾングループで特命担当として働く当時の私は、ソ連出張を繰り返しておりました。同時に、(社)企業メセナ協議会設立前の準備時から幹事職にありました。当協議会はフランス企業のメセナ活動から影響を受けての設立でした。民間企業で主に貿易実務に猪突猛進してきた自分を振り返り、「何に取り組むべきか」「具体的に何ができるのか・・」と思い悩んでいました。設立当初より某新聞社が主導権を握っており、早速、某広告代理店が絡んでおりました。元々が町工場の旋盤工からスタートした職歴。コツコツと早朝から工場で地道に働く、民間企業の血が流れている私です。とても悩ましい問題でした。

セゾンコーポレーション会長で詩人、小説家の堤清二(1927~2013)から、「ソ連との合弁企業の設立と文化ビジネス構築」の可能性を探るよう指示が出ておりました。(社)企業メセナ協議会では初代会長の鈴木治雄(昭和電工名誉会長、1913~2004)から「人生は経済や技術だけでは解決しない。そこで必要なのは芸術ではないのか」と、あの柔らかい口調で薰陶を受けていました(注6)。日本企業がアメリカに現地法人を設立し、血眼で事業の拡大を展開する中、「フィランソロピー」の精神を取り込むよう求められていた時代(注7)です。本社機能がある日本が大慌てしていた時代と記憶しています。経団連が社会貢献部を新設し、ワンペーセント・クラブをつくり、各企業に企业文化部、芸術文化担当の部署が新設された時代です。1990年代前半は各領域で文化インフラの整備に手が付けられました。前書きが長くなりましたが、その集大成が「文化経済学会」の誕生でした。

それを物語るように、学会設立の発起人には、大学を中心とする研究者だけではなく、企業、芸術界、官界などから170人が名前を連ね、見事なまでに開かれた学会としてスタートしました。会員も、一般主婦層、行政職にある人、マスコミ関係者、芸術団体経営者、オペラ演出家、美術館学芸員・・と幅が広く、大学教員も情報、教育、社会福祉、法律、建築・・など専門の研究領域が広範囲にわたりました。設立後の懇親会のこと。司会進行役を担っていた私に「文化経済学会は高級異業種交流会だね」と耳打ちする人が・・。会員の属性に依拠しているのでしょうか、愉快で心地よく、堅苦しさが一切ない、不思議な雰囲気をもつ学会でした。研究発表を行う年次大会は、1993年5月29、30日の横浜を皮切りに、京都、高崎、福岡、長岡、山口・・と会場を東西に移して開催しました。大学が多い大都市を中心に開催されがちな学会ですが、文化経済学会は全国を巡り、「文化経済学」の名前を浸透させようという目論見も多少はあったように思います。横浜大会で発表後に初めて書いた論文、「『芸術経営学』体系化の試み」が

『文化経済学会〈日本〉』論文集第1号、1995年3月』に収録されました。

5 文化経済学の系譜と動向

文化経済学が取り組む、文化が経済に与える影響、経済が文化に与える影響、その相互関係は、実務で経験しておりました(注8)。そのような折り、1991年の9月付で大学に採用されました。余りに急な転職で、90分の講義を半期15回で行う「講義ノート」が出来ておりません。横道に逸れますが、数年後に九州産業大学への出講が決まった折りのこと。教務担当者から「先生には『文化経済学』の講義をお願いしておりますが、講義要項通りの授業ではなく、寧ろ今まで経験されたことを学生にお話し戴きたい」との申し出。各大学に「文化経済学」の科目を設置しようと翻弄していた私は、求められている内容に驚いてしまいました。

さて、「講義ノート」をつくる準備に入らなければなりません。そこで文化経済学の系譜と最新動向を、主に学会や研究会でご一緒している方々から直接的・間接的にご教示を戴くことにしました。本来なら皆様全員のお名前をあげ、業績などを紹介させて戴きたいのですが、とても不可能です。どうかお許し下さい。

比較文明学を中心に「情報産業論」を早い時期から提起し、文化行政が始まつた当初からの指導者として梅棹忠夫(1920~2010)がいます。文化と経済の乖離現象に懸念を示し、1970年代から文化の経済化、経済の文化化を理論的に深めました。日本に於ける現代文化経済学創設者の一人で『文化施設の経済効果』(総合研究開発機構)は、文化経済学研究の先駆的なものとなっています。

日本に於ける西洋クラシック音楽の分野で、市場がどのような形態と特徴をもって形成されているかを分析した経済学者に、元国連本部統計局局長の倉林義正(1926~2021)がいます。日本人が好む音楽の相関図、聴衆が好む音楽の職業別分類、聴衆の所得分布を統計学の視点から分析。需要の分析だけではなく、供給ないし生産の側面の分析を、非営利サービスの特性に関わらせて行いました。

池上惇(1933~)は、J・ラスキン(1819~1900)とW・モリス(1834~1896)に始まる文化経済学の系譜と理論を日本に紹介し、その膨大な著作から多くの研究者が影響を受けています。グローバル化された世界から「文化と経済」の双方が危機的状況を迎えていることを憂慮し、この2大要因を結合させ、ラスキンが提唱した固有価値論を現代情報社会の中で再構築させ、従来の物的所有権中心の社会から知的所有権中心の社会に転換するシステム構築の必要性を説いております。

山田浩之(1932~)は、文化産業に新しい境地を開きました。文化経済学の分野

で実証分析を行うには、①文化や芸術への造詣、②経済学(特にミクロ経済学と公共経済学)、③統計学と計量経済学の基本的な考え方と手法(特に手法適用の前提条件と結果の解釈)についての知識と経験、④経済統計データに関する理解、⑤統計解析用ソフトウェアパッケージの知識、以上のいずれかが欠けても適切な文化経済学の実証研究を行うことが出来ないと示唆しました。

建築家で昭和音楽大学学長の守屋秀夫(1931～2000)は、芸術振興の基礎となる統計整備に参加し、劇場運営方策の開発研究に携わりました。文化施設の建設や劇場経営に深く関わり、建築と舞台芸術を結び付けた研究業績は大きい。2代目理事長、4代目会長として草創期の文化経済学会〈日本〉の骨格をつくるとともに、研究者に対して指導的役割を果たされました。

社団法人企業メセナ協議会創設者の一人で資生堂会長の福原義春(1931～2023)は、経営を経済的・文化的・社会的な総合活動と位置づけ、企業は文化を生産していると首唱しました。自ら蘭の栽培や写真撮影の趣味を持った文人経営者でもありました。経営活動の活性化を可能にするのは文化資本の働きであることを証し、文化資本経営の理論を構築しました。

元文化庁長官の植木浩(1931～)は、文化と経済の関係を考える基礎として、Utility(効用、有用性、利便)とValue(価値)の二面論を提唱。前者は人間の生活に具体性を持って役立つという意味で大切な必要性(Necessity・Usefulness=有用性)の世界で、言い換えれば経済に代表される。後者は人間存在の本質に固着性を伴って関わりを持ち、それ自体が本質性(Essentiality)の世界で、言い換えれば文化に代表されると示唆した(注9)。

元文部事務次官の木田宏(1922～2005)は、「教育の力が文化に及んでいない」と憂慮し、教育を文化振興の基本に据えました。小中学校から指導者がついて基礎能力を養うスポーツに比べても、実演家要請教育は遅れており、基本的に考え直す必要があると説いたのです。生涯学習を文化活動と捉え、文化サイクルに組み入れたモデルの形成を提唱したのが文化政策学者の野田邦弘(1951～)で、文化とジャーナリズムの相互関係の研究を通じ、文化、ジャーナリズム、市場の関りから積極的に発信してきたのが永井多恵子(元NHK副会長、1938～)です。

文化人類学者の端信行(1941～)は、人間の経済行動の文化的意味を探求してきました。例えば、アフリカの王政社会が、どのような経済原理で運営されているかを調査し、富の集中と分散の形態や、税の体形とその見返り(サービス)といった経済機構のメカニズムを明らかにしました。こうした事例を集めて『文化としの経済—文化人類からの接近』(ダイヤモンド社)を上梓しております。

6 おわりに一今なお学びの身一

或る日のこと、池上惇は「論文を書く場合は形式に拘らず、自由に書いて貰つて構いませんよ」と仰って下さいました。民間企業で働いていた1991年まで、新聞や雑誌に雑文を入稿する機会はあっても、論文(らしきものも含めて)を執筆したことはありませんでした(注10)。学問の世界に疎かった私には、ホッとするお言葉でした。そして「このようにして人を育てるんだ」と気づかされました。

加えて山田浩之と共に編の『文化経済学を学ぶ人のために』(世界思想社)で初めて、執筆の機会を与えて下さいました。編集部から執筆依頼が届いた時は、嬉しい気持ちに、私が大丈夫かな?という心配が入り混じって複雑でした。編集者の《赤》がたくさん入りましたが、与えられたテーマ「メセナの時代—日本のメセナ、生成・現状・課題—」で、分担執筆者の一人として初めて、文化経済学関連書の上梓となりました。池上惇には文化経済学シリーズ全10巻(芙蓉書房出版)の共同監修もお願いし、ご快諾を得て出版出来たのは有難いことでした。出版社と私の間に信頼関係があっても、私一人の力量では荷が重かったからです。

文化経済学会福岡年次大会(ももちパレス:福岡県勤労青少年センター・アーツホテル・アクロス福岡、1996)の開催担当を理事会で仰せつかりました。福岡県庁、福岡県教育委員会、福岡市役所、福岡市教育委員会、NHK福岡放送局、RKB毎日放送、KBC九州朝日放送、西日本新聞社、朝日新聞社、読売新聞社・・に足を運びました。加えて「平成8年度福岡市芸術文化活動助成事業」として認めて戴く必要もありました。何よりも発表者には、日頃の研究成果を示して戴く大切な機会です。福岡大会開催前日の夜、「忙しい思いをさせた。ご苦労だったね」と守屋秀夫が一席を設けて下さった。その温かいお気遣いは忘れていません。

大學の経済学部に文化経済学科を設置しているのは、新潟産業大学と久留米大学の2大学と思います。25年の間に、両大学を含む幾つかの大学(11)で「文化経済学」と、その関連科目を講じる機会に恵まれました。振り返ると、理事会や各地での年次大会、研究会、文化経済学会〈日本〉九州部会主宰の大会、その後の懇親会などを通し、尊敬する企業人、研究者、芸術家、文化経済学に関心を寄せて下さる方などと広く縁が出来ました。そして、かような皆様方が私を育てて下さいました。学会や大学を離れて10年になりますが、私は今なお学びの身です。「文化経済学」には感謝しかありません。(本文中の敬称略)

【注】

(1) 1970 年代は我が国の人団増加が顕著で、国民の食糧事情が悪化しつつあった。そこで水産業界は漁獲量の確保に向け、トロール操業で遠洋漁業に力を入れた。大西洋は世界 7 大漁場の一つとして注目を集めており、わが国では初めて、水産庁主導の国策会社が合弁で設立された。私は合弁会社に入社後、現地法人のモーリタニア水産株式会社に出向、主に領海内操業に伴う渉外折衝の仕事に携わった。詳細は、財団法人昭和経済研究所の Web マガジン、2024 年 6 月号「砂と海と太陽とーサハラでの挙式ー」に掲載。

(2) ラスキンは固有価値を資源や環境の価値と関連させようとした。自然資源や環境の「固有的性質」を把握し、その性質を創意工夫の中で活かすことを主張した。人間の固有性は自然の固有性を活かしてこそ發揮され、自然の固有性を無視した人間の固有性は有り得ないとした。「固有価値論の発生と展開」は、池上惇『文化と固有価値の経済学』(岩波書店)に詳述。社会主義の装飾美術家モリスの理論が、どれほどラスキンの思想に負っているかいないを明らかにした社会思想史研究書に、大熊信行『社会思想家としてのラスキンとモリス』(論創社)。

(3) 遊牧は数人単位で行う。その数が多ければ食べて行けず、独りでは生きて行けない。遊牧民は何人かで役割を分担して生きる。預言者ムハンマドは共同体について、彼の美しい最後の説教でこう語っている。「皆の者よ、あらゆるムスリムは互いに兄弟(姉妹)である。ムスリムは互いに兄弟(姉妹)の絆で結ばれている」。イスラム社会のメカニズムとして「独りでは生きられない遊牧生活」については、ひろさちや+黒田壽郎『世界の聖典コーラン』(鈴木出版)に詳述。

(4) アラブ人は直ぐ得意になる。彼らは自分の弱さを非難されると、断固たる自信、挑戦、脅しの態度を見せ、決意と勇気を誇示する。「ざわめきのある川を渡れ。静かな川は渡るな」という諺は、気難しい人、口やかましい人こそ、最も信用できると考えていることを意味する。アラブでは、実際の人となりより、どう振る舞うかが遙かに重要である。「アラブ人の尊大と誇張」は、サニア・ハマディ・笠原佳雄訳『アラブ人の気質と性格』(サイマル出版会)に詳述。

(5) 文化を通した社会貢献事業と経済活動に於いて、文化の果たす役割に対する関心の高まりを背景に財界関係者、芸術文化関係者有志で「芸術文化振興基金推進委員会」を結成し、議論を深めた。そして文部科学省所管の独立行政法人日本芸術文化振興会が設立され、運用益で助成する特殊法人芸術文化振興基金が創設された。

(6) 堤清二はメセナ成立を目的に、企業と文化の双方が本質的で持続的な動きが出来るようにするには、(イ)どのような注意が必要で、(ロ)何処に力点を置いたら良いかを理解することが不可欠、と主張した。鈴木治雄は、我々日本人が文化や芸術で、どれだけ独自性を持った

貢献が出来得るかが問題。一人ひとりが個性的であらねばならぬと同時に、日本全体が文化の面でもっと個性を發揮し、自らを高め、世界の人に示す努力が必要、と語った。以上、佐々木編『企業と文化の対話—メセナとは何か—』(東海大学出版会、1991)に詳述。他の執筆者に、経団連 社会貢献部 朝倉永子、オリンパス光学工業社長 下山敏郎、ワコールアートセンター社長 藤沢哲二、『デジャヴュ』編集長 飯沢耕太郎、美術家 石井勢津子、山海塾プロデューサー 市村作知雄、俳優 金田龍之介、劇作/演出家 如月小春、ライブプロデューサー 木村万里、(財)新星日本交響楽団専務理事 横松三郎、音響デザイナー 庄野泰子、常磐津三味線方 常磐津紫弘(現・常磐津文字兵衛)、尺八奏者/作曲家 中村明一、劇団ふるさときやらばんプロデューサー 平塚順子、(社)日本芸能実演家団体協議会芸能文化振興部長 大和滋、国際交流基金 古賀太、丹青社監査役 佐々木朝登、昭和音楽大学理事長 下八川共祐、尺八奏者 クリストファー遙盟ブレイズデル、神奈川大学教授 松岡紀雄、トヨタ財団プログラムディレクター 山岡義典、ニッセイ基礎研究所主任研究員 吉本光弘、世田谷区長 大場啓二、特殊法人日本芸術文化振興会基金部長 初見忠男、文化庁文化部長 渡辺通弘の28名。所屬先と肩書は1991年当時。

(7)現在(2025)はどうか。すでにグレートなアメリカだが「マーク・アメリカ・グレート・アゲイン」と喧しい。アメリカは貧困、難民など世界各所の人道援助に対処している最大の貢献国で、2024年には139億ドルを供給したと推計されている。世界保健機関、世界食糧計画、国連児童基金、国連難民高等弁務官事務所・・・こうした国際機関への主要な資金拠出国でもある。ところが、領土、資源を獲りに行き、WHOの脱退、対外援助の凍結、関税胥して権威主義の国々を勢いづける「力の支配」を善しとしている。自国とリーダーの自分が得になるなら、他国が苦しんでも構わないと考えるなら、あのフィランソロピーの理念を掲げた国とは余りに乖離している。

(8)カメラメーカー勤務時代にフランスに駐在(1979~1986)、オートクチュール・デザイナーのアンドレ・クレージュ(1923~2016)にカメラのデザインを依頼した。肝心な時は開発担当重役がパリに来た。クレージュから「黒は大嫌いだ。レンズの色を白く変えて欲しい」との難しい要求もあった。妻、コリーヌも一台、デザインをした。開発部デザイン課の方が来仏のお折りは、由緒のあるホテルを予約し、美味しいフランス料理を食べて戴き、古いパリの街並み、バルビゾン、フォンテーヌブロー、ヴェルサイユ…などの案内に努めた。



平幹二郎主演「王女メディア」のギリシア公演(1984)後、蜷川幸雄(1935~2016)一行がパリに立ち寄った。親しかったクレオーン役の金田龍之介(1928~2009)と真夜中、ヴェルサイユ宮

殿まで車を飛ばした。「フランスの戯曲を翻訳して欲しい」と語っていたが・・。篠山紀信(1940~2024)のシノラマ(「シノヤマ」と「パノラマ」を結合した造語)制作ではメーカーの窓口になった。シノラマでは、コンピューター制御された9台のカメラが一斉にシャッターを切る。高精度で複合的な写真像を得ることが出来た。こうして写真はアルバムから飛び出し、劇場で見る媒体になった。鎌倉の平山郁夫(1930~2009)邸には度々出掛けた。美知子夫人から「寒いとフィルムが割れるよね」と相談があった。(それはカメラボディではなく、フィルムの問題では・・)。平山邸に入りしていると知った会社の同僚が「ゴミ箱に平山画伯の書き損じが入っているかも。書き損じでも平山画伯の絵なら貴重だよ」(もう・・何考えてるんだ)。

(財)セゾン文化財団でソ連から、日本文学の研究者を招聘した。それには安部公房(1924~1993)から堤清二への進言があった。成城の大江健三郎(1935~2023)宅で研究者と、ゆかり夫人の手料理でご馳走になった。安岡章太郎(1920~2013)が長女の治子(ロシア文学、現東京大学名誉教授)を伴い来られて同席、微妙な話が交わされたかに思います。(エッセイですから多少は・・と思いますが、ゴメンナサイ!守秘義務、守秘義務)。或る日、ドナルド・キーン(1922~2019)が現れて・・全ては堤案件である。

話は変わるが、お相撲さんが拙宅出入りしていた。神事としての相撲は美しい。美しくなければ相撲の魅力は半減する。大鋸順『スポーツの文化経済学』(芙蓉書房出版)で、大相撲を取り上げているが、ここでも「文化と経済」が強く結びついている。

(9)文化と経済は相互に密接かつ複雑に関連し合っており、二つの関連を追い求めて行くことで新しい扉が開かれると示唆した。植木は、地震発生のプレート・テクトニクス理論に例え、明治以来、経済という名のプレートの動きが遙かに強く、文化のプレートとぶつかり合いながらこれを抑え込み、引きずり込んできた。「100年以上経った今日、これ以上の歪みには耐えられないとばかりに、文化のプレートが跳ね上がった」と自論を展開した。佐々木編前掲書「文化と経済の新しい道」に詳述。

(10)文化経済学会〈日本〉発足当初の、学会発表および掲載論文(他学会での一部活動を含む)。

(イ)口頭発表

「芸術経営学の必要性」(第一回文化経済学会、神奈川県立県総合センター)1993

「芸術経営学講座シリーズの編纂を通した諸課題分析」(第二回文化経済学会、京都大学)1994

「経営学における芸術経営学の位置づけ」(第四回文化経済学会、福岡県ももちパレス)1996

「フラワーデザインと生活」松下尚代と共同発表(同上)1996

「カラオケ文化の実態分析」松浦理美と共同発表(同上)1996

「フラワーショーの海外/日本の実体分析」長山尚代と共同発表(第五回文化経済学会、長岡市 長岡リリックホール)1997

「企業メセナの日仏比較」(第33回日仏経営学会、作新学院大学)1999
「異文化とコミュニケーション」(第四回社会経済国際シンポジウム、福岡県)1999
「文化経済学の展望」(第五回社会経済国際シンポジウム、中国・北京)2000
「異文化環境と異文化経営—異文化の壁を超えるグローバリゼーション—」(進化経済学会九州部会 第17回研究会、九州産業大学)2000
「劇団『四季』の経営分析」(韓国・大邱広域市 文芸会館)2001
「公共文化施設のありようを問う—指定管理者制度を視座に—」(第九回社会経済国際シンポジウム、中国・長春市)2004
「美容&お洒落の考察—中日関係を視野に—」(第11回社会経済国際シンポジウム、中国・凱里市)2006
(ロ)論文発表
「芸術経営学体系化への試み」『文化経済学会』第1号, 1995
「いまなぜ芸術経営学か」月刊『社会教育』通巻588号, 50巻6月号, (財)全日本社会教育連合会, 1995
「フランスの文化行政と芸術活動支援体制—アートマネージメント(芸術経営)機能と効果に関する総合研究—」『平成5~7年度科学研究費補助金研究成果報告書』研究課題番号: 05306007, 1996
「Money And The Arts」月刊『LOOK JAPAN』Vol. 42, 1997
「物教徒への終焉と芸術経営学」『世界思想』特集「人間と創作」25号, 世界思想社, 1998春
「異文化コミュニケーションの日仏企業メセナ考察」『日仏経営学会誌』第17号, 2000
「芸術経営論の今日的課題」『文化経済学会』第2巻 第1号, 2000
「劇団四季の経営分析」『韓国成均館大学紀要 Journal of Performing Arts in Korea』2001
「芸術経営学の試論」『韓国公演文化産業研究所 Culture & Performing Arts Journal 1』2001
「芸術経営学教育の現状と課題—モントリオールHECから学ぶ日本の方向性—」『日仏経営学会誌』第20号, 2003
「公立文化施設の望ましい運営の在り方—指定管理者制度の導入を視座に」『公共文化施設研究会報告書』財団法人福岡県市町村研究所, 2005
「公立文化施設の有りようを問う」『福岡県市町村研究所研究年報』財団法人福岡県市町村研究所, 2005
他に本務校『大学紀要』に執筆。

(11) 日本の大大学: 久留米大学、九州産業大学、九州女子短期大学、静岡文化芸術大学、亜細亜大学、跡見学園女子大学、新潟産業大学。外国の大学: 台北芸術大学大学院(台湾)、HECモントリオール(モントリオール高等商科大学院)(カナダ)、レンヌ第一大学大学院(フランス)、明知大学大学院(韓国)。